

最初に、本パネルのテーマに関する私の主要な関心と、その問題意識の由来を簡単に紹介した後、各発表者へのコメントと質問を述べたい。

私の専門分野はイスラームだが、イスラームとの比較から日本的宗教について考察している。シャリーアが儀礼規範、婚姻などの法的規範、食物規範などを包摂するように、イスラームは信仰者の社会生活を統合する宗教である。日本の宗教はそれとは対照的で、神道と仏教、儒教が共存し、J・M・キタガワはその関係を「宗教の分業」と説明した。本パネルの発表でも神道への言及は少ない。仏教の研究者はほとんど神道に言及せず、神道研究者も仏教に触れないのが日本の宗教研究の現状である。グローバル時代を迎えて、日本人が素朴に「自分は無宗教」とする自己理解は不適切で、いかに日本の宗教を他者に説明できるかが日本の宗教教育の差迫った課題である。とりわけ伝統的に教義体系のない神道を説明する工夫が必要だろう。第二に、私は日本にムスリム移民が増加すれば、日本社会との軋轢を生み、排除されかねないとの危惧を抱いている。これらの観点から以下の質問をしたい。

藤原聖子氏はイギリスの宗教教育について、異文化共生の知識教育だけでは社会の分断を阻止できず、宗教の価値への踏み込みや、行動する信仰者を視野にいったコミュニケーション的な宗教観に基づく教育への転換を説明した。相当数のヒンドゥー教徒やムスリムが暮すイギリス社会では、多宗教、多民族の相違（分断）が見えるが、移民や難民の受け入れに消極的な日本では、異質な人々との相違が見えにくい。このような日本社会でコミュニケーション的な宗教観は日本人に理解されるのか、どのように教えられるのが私の第一の質問である。それと関連するが、日本人は自分の生活様式に潜む宗教を宗教とは意識していない。この問題をどのように扱い、教えることができるのか知りたい。イギリスから学んだ適用例や、日本社会を前提とした宗教教育の事例があれば紹介してほしい。

土井健司氏は脳死問題が今では「知のパッケージ化」されて、考えなくなっている危険性を指摘し、考えることの重要性を訴えた。だが、「知のパッケージ化」は一面では、時間の経過とともに脳死問題に一定の合意が形成されたことを意味しないか。日本社会では、このように一度、合意された考え方や生活様式は根強く、それに異を唱え、別行動をとる人々を抑圧し、ときに排除しがちである。「知のパッケージ化」は脳死問題に限らず、日本的な考え方、生活様式に潜む他の問題にも一般化できるのではないか。日本の生活様式に異を唱える者を抑圧し排除することは、合意された生活様式が一種の規範性を帯びるようにも思える。第二に、キリスト教系の学校でのキリスト教という宗教を考える教育に言及したが、公立学校でどのように宗教や宗教の立場を考えることが可能か。この点についてどう考えるかを尋ねたい。

最後にヨーン・ボルプ氏には、デンマークでイスラームがどのように教えられているのかを尋ねたい。最近ではイスラームへの偏見がないわけではないとすれば、それをなくするために、イスラームの教え方にどのような工夫がなされているのかを聞きたい。近代以後、とりわけ二一世紀前後からはイスラーム過激派がテロや紛争をおこなっているが、ヨーロッパ列強が侵入する以前の中東イスラーム社会はユダヤ教徒やキリスト教徒に寛容だった。オスマン帝国はイベリア半島を追放されたユダヤ人を受け入れ、土地と住居さえ与え、その子孫がまだイスタンブールに残っている。アルメニアの司教座教会はスルタンによって建設された教会だという。イスラームの寛容な一面、そういう時代があったことを積極的に教えているかどうかを知りたい。